

早稲田大学比較文学研究室 講演会開催報告

吉増 剛造 氏 講演会「詩を縫い、書物を膝る —— 『火ノ刺繍』から全詩集へ」

日時：2018年12月10日（月）18:15-20:00

場所：早稲田大学文学学術院（戸山キャンパス）36号館382教室

主催：早稲田大学比較文学研究室（早稲田大学総合人文科学研究センター）

2018年12月10日（月）18時15分より、戸山キャンパス36号館382教室にして、早稲田大学総合人文科学研究センター研究部門「早稲田大学比較文学研究室」の主催で、詩人の吉増剛造氏をお招きしての講演会「詩を縫い、書物を膝る —— 『火ノ刺繍』から全詩集へ」が開催された。

はじめに吉増氏の最新刊『火ノ刺繍』、特にその巻頭に日仏対訳で掲げられた書き下ろしの詩作品から採られた本講演の題目について堀内正規文学学術院教授より紹介があり、そののちに吉増氏の講演に移った。告知のチラシや立て看板などに『火の刺繍』と誤記したものが使われていたことについて堀内教授からお詫びと訂正があったことを話のきっかけに、吉増氏は漢字の「乃」から平仮名と片仮名の「の」「ノ」が成立したことを踏まえたうえで新古今時代の歌人・藤原定家の手蹟では「能」を崩した字が平仮名の「の」の代わりに使われていたこと、定家の手蹟が王羲之のそれを踏まえていることなど、「手で文字を書く」という行為の具体性から出発することでまったく別様な理解への道がひらかれることに話題を移していった。そこから早稲田と関係の深い北村透谷や吉田一穂といった詩人たちの言葉について、いかにそれが書かれた手つきや土地柄に根ざしているか、来場した詩人や批評家、編集者や学生とことばを交わしながら話が展開してゆき、近年の吉増氏の重要な仕事である、吉本隆明の詩や批評を、ひらがなをカタカナに置き換えつつ筆写するという過程のなかで、吉本が「ぼろ」という言葉に「亡露」という字を当てていたことなど、手や土地の具体性に基づきながら読む／書くことで、詩人＝思想家による詩作＝思索の現場が眼前に立ちあわれ、そこに立ち会うかのような体験へとつながっていくことが語られた。

さらに手つきの問題から、吉増氏の映像作家としての主要な仕事である「Gozo-ciné」のひとつの展開として、フリージャズや、親交のあるピアニスト・詩人のヴァレリー・アフアナシエフの演奏をCDで流した部屋で、そのメロディと重なり合いつつどこかで離れてしまうような声を即興で口走りつづけながら、目隠しをした吉増氏が文字を筆写した紙を貼り合わせたものの上に墨にひたした筆を走らせつつ、同時にもう一方の手にもったビデオカメラでそれを撮影するというパフォーマンスの映像が上映され、来場者の感情をおおしく揺さぶった。アフアナシエフを本学に招いたことのある文学学術院の小沼純一教授との「アフアナシエフの演奏の遅さ／速さと吉増氏の速度」をめぐる対話をはじめ、映像の上映を挟んで会場のさまざまな人々とのあいだに吉増氏は積極的にマイクを渡して対話を仕掛

け、学生の「言葉とは呪いではないか」という質問を受けて、さきに上映したようなパフォーマンスの産物が展覧会などのかたちで展示され、「作品」になってしまうことで制作が止まってしまったことと関連付け、なにかが「作品」として全体性へと回収されてしまうことに抗うかのように自らの詩集をハンマーで幾度も殴りつけてみせるなど、会場内でのパフォーマンスへ移行していった。最終的にはアイマスクをつけ、白い紙をテープで貼り付けることで口もとを隠した吉増氏が、持ち込んだ原稿用紙に万年筆のインクを縦横無尽に垂らし、さらにそこに即興で手を加えていくというパフォーマンスがおこなわれ、詰めかけた聴衆は席を立てて最前列に集まり、相互に声を交わすことで吉増氏のパフォーマンスに参加していくかたちで、本講演は、「終了」というよりは、じわじわと「収束」した。

吉本隆明の初期詩篇「日時計篇」など、なかなか評価の定まりきらない、あるいはすでに評価の定まってしまった「作品」を書き写す行為を通じて、その文字を紙片のうえに刻み付ける詩人の「手つき」にこだわることで、いまだ「作品」になってしまう前の何ものかが生成してゆく瞬間の現場がふたたび現前し、反復が差異を生み、そこから新たな何ものかが生まれてくる光景には、文体 *style* の語源 *stylus* がもともと蝋板に文字や記号を刻み付けるための、鉛や鉄、動物の骨などを削って作られた「尖筆」であったことを想起させるころがあった。「ことば」や「声」について既成概念を根こそぎ覆し、まったく新しい体験を通じて認識が変容し、刷新されてゆく、きわめてスリリングな緊張感漂う時間となった。

(記録・吉田隼人)





